

## 課題 「夏も楽しむ」

徒然草に「家のつくりは夏を旨とすべし。冬は如何なる所にも住まる。」とあります。北海道ではこれを「冬を旨とすべし、夏は如何なる所にも住まる。」と考え、家をつくってきました。

昨今温暖化により、住宅や学校に冷房が設置され、北海道の夏も様変わりしてきました。高断熱・高气密の密閉空間に冷房を設置するのが果たして「あずましい」暮らし方でしょうか？

夏の札幌は、那覇と比べて2時間近く昼が長いし、昼間30℃を超えても夜間は涼しく過ごせます。厳しい冬をケアしながら、もっと夏も楽しみませんか。

従来、冬を旨としてきた北海道でもっと夏も楽しむならどんな住まいになりますか？

### 計画条件

- 北海道内の地域と敷地、住戸形式、家族構成等は自由に設定してください。

### 賞 金

- 最優秀賞 25万円（1点）
- 優秀賞 5万円（2点）
- 奨励賞 2万円（4点）

### 締 切（厳守してください）

- 2024年9月20日（金）持参の場合は16:00必着。郵送の場合も9月20日（金）に間に合う様必着。（なお、土・日・祝日は受付できません。）

### 参加資格

- 一般、学生等を問いません。
- 北海道内居住者とし（学生・生徒は北海道内の大学等に在籍している者に限り）。
- 個人参加、グループ参加は自由です。

### 提出物

- 図面  
設計趣旨及び設計意図を表現する図面（縮尺は自由）。  
図面には、氏名、記号などを記入しないでください。  
A1（841×594）サイズ一枚、横づかい（縦づかいは無効です）。表現は自由です。  
ハレパネ又はスチレンボード（厚さ5mm程度）

などでパネル化してください。表面の貼付材がはがれないように作成してください。

- 返信用に使用するハガキ  
受付番号をお知らせするために使用します。63円の官製ハガキに応募者の住所・氏名を記入して提出してください（官製はがき以外は、受付できません）。
- その他
  - 応募作品の「作品名」
  - 応募者氏名（フリガナ）、所属先名（学生は、学校名・学年）、電話番号、住所
  - 以上をA4用紙に記入し応募作品とともに提出してください。

### 審査委員（委員は五十音順）

- 委員長 米田 浩志  
北海学園大学工学部建築学科教授
- 委員 赤坂 真一郎  
㈱アカサカシンイチロウアトリエ代表取締役
- 委員 小澤 丈夫  
北海道大学大学院工学研究院教授
- 委員 小西 彦仁  
ヒココニシアーキテクチャ㈱代表取締役
- 委員 佐藤 孝  
北海道科学大学工学部名誉教授
- 委員 澤田 貞和  
㈱日本工房会長
- 委員 松田 真人  
㈱都市設計研究所代表取締役

## 選考経過

### ①一次審査 2024年9月30日(月)～10月4日(金)

一次審査通過者の受付番号は10月11日(金)頃に主催者ホームページ (<https://www.do-kjk.or.jp/>) で発表します。

### ②二次審査 2024年11月1日(金)10:00～

一次審査通過作品から10作品を選出します。

### ③最終審査 2024年11月1日(金)13:00～

二次審査通過作品(10作品)から各賞(計7作品)を決定します。

最終審査は「公開審査」とし、当協会8階A会議室で行います。

## 入賞者発表

### ・2024年11月上旬

入賞者に直接通知するとともにホームページでも発表します。

(一社)北海道建築士事務所協会ホームページに掲載し公開

ホームページ URL <https://www.do.kjk.or.jp/>

- ・1次審査通過作品は、協会広報誌「ひろば」(12月発行)に掲載します。また、最優秀賞受賞の方には、同誌への寄稿をお願いしています。

## 応募作品の著作権等

- ・応募作品の著作権及び版権は、応募者のものとします。ただし、この事業の趣旨に基づいて、主催者が図書の出版や、新聞、雑誌、その他に掲載又は啓発宣伝などに利用する場合は無償で認めるものとします。
- ・応募作品は原則として返却しません(返却希望の場合は、事務局に相談してください)。

### 提出先

〒060-0806 札幌市北区北6条西6丁目2番地  
設計会館 9階  
一般社団法人 北海道建築士事務所協会  
TEL 011-788-7650

ホームページアドレス <https://www.do-kjk.or.jp/>

※持参される方：平日9:00～17:00受付

但し、締切日は16:00まで受付

## 第49回「北の住まい」住宅設計コンペ 入賞者名簿

最優秀賞 (共同作品)	木下 はるひ 貝出 萌華	室蘭工業大学大学院2年 室蘭工業大学大学院1年
優秀賞	納谷 龍輝	北海道建築設計監理 株式会社
優秀賞	大瀬戸 杏	学校法人美専学園 北海道 芸術デザイン専門学校2年
奨励賞	杉下 英宇	北海道科学大学4年
奨励賞	田中 篤史	北海学園大学2年
奨励賞	納谷 龍輝	北海道建築設計監理 株式会社
奨励賞 (共同作品)	小西 神太郎 田村 さやか	北海道科学大学大学院1年 北海道科学大学4年

## 主催

(一社)北海道建築士事務所協会

## 後援(順不同)

北海道

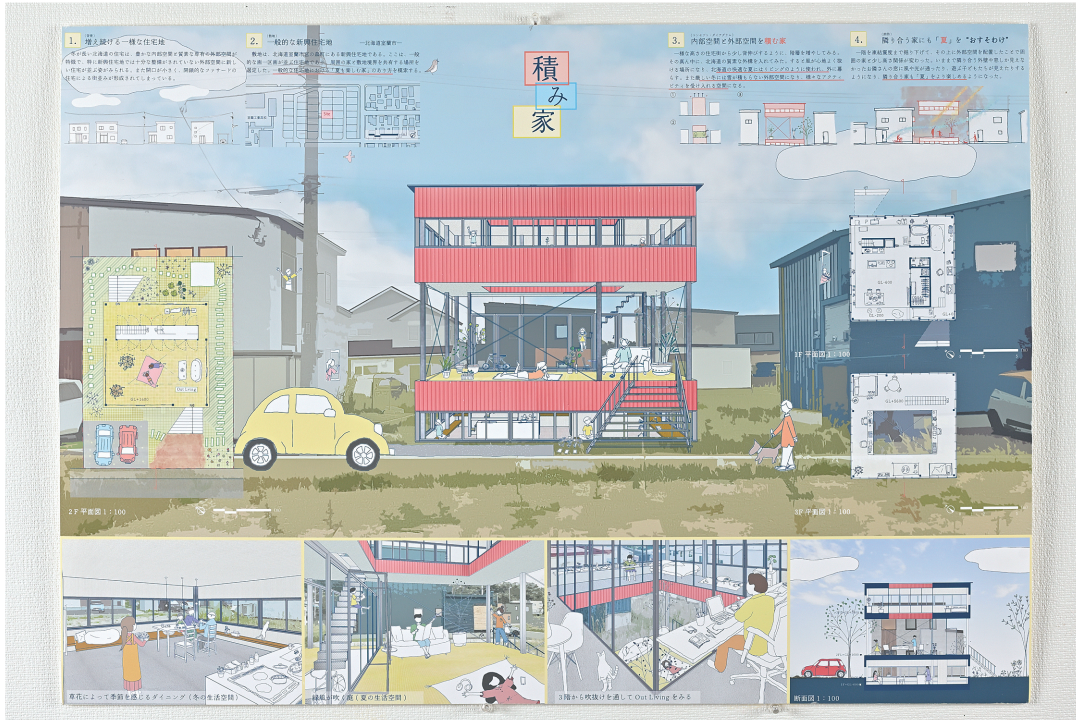
- (一財)北海道建築指導センター
- (一社)北海道建築士会
- (公社)日本建築家協会北海道支部
- (一社)日本建築学会北海道支部
- (株)北海道建設新聞社

最優秀賞

# 「積み家」

木下 はるひ (室蘭工業大学大学院 2年)  
貝出 萌 華 (室蘭工業大学大学院 1年)

(共同作品)



作者が指摘している様に、北海道の住宅は豊かな内部空間と質素な専用の外部空間が特徴となっています。この街並みに対して、ちょっとした気づきが大きな成果をもたらしました。

それは、1階レベルをわずかに地中にもぐらせ、2階床を3階レベルまで上げて、中間に外部空間を挟むことで狭小敷地でありながら、敷地全体が豊かな外部空間に変身し、隣の家の1階の窓に対して、風や視線が抜ける効果をもたらしました。

この中間レベルの外部空間は、夏も楽しむ庭(夏の居間)であるのは勿論、冬も雪の積もらない外部空間となり、冬の北海道のアクティビティーを増幅させます。例えば、本州にある雨戸の様な建具を冬だけこの庭の周囲に廻らせることもでき、大きな可能性を秘めています。

建築家安藤忠雄さんが大阪住吉の長屋で狭小敷地を水平方向の外部空間で挟み豊かな住空間を実現しました。今回提案は、垂直方向に外部空間を挟むことで、北海道のマッチ箱を並べたような貧弱な市街地に強いインパクトとなると共に、住み手の豊かなアクティビティーを誘発しそうです。

平面計画も、間仕切りがほとんどないオープンでありながら、作り付けのカウンターなども建築化した心地の良い住空間を実現しています。更に3階の穴の開いた回遊型のプランも秀逸です。

また、道路面から1.6mほど上がった夏の居間は、このわずかなレベル差により、オープンでありながらプライバシーも守れそうです。

構造は鉄骨造のように見えますが、木造でも可能な様に思えます。中間ピロティ階にブレースを配置するなど構造合理性もあり、実務経験のある社会人ではなく大学院生と聞いて驚いています。

熱環境的には、内部床面積に対し外皮面積の割合が非常に大きなことは否めませんが、従来のコンパクトなマッチ箱と、この作品で実現した豊かな住空間を比較すれば、断熱・気密技術が確立されつつある現状では、今後の北海道の住まいを考える良い素材になっているのではないのでしょうか？

出来過ぎが欠点と思わせるほど完成度が高い割には、提案性も高く、文句なしの最優秀として審査員全員が納得できる作品でした。作りこみの能力が高いので、チンマリまともになってしまう事だけが心配です。大きく育ててくれること、いつかこの提案を実作として実現することを期待します。

設計競技審査委員会委員 松田 真人

優秀賞

# 「湖畔の詩」

納谷 龍輝

北海道建築設計監理 株式会社

納谷さんの想定した住宅は、洞爺湖畔に建つ。この作品は、大地から湖水に降りる自然地形と建築的地形に生じるアクティビティと風景をとらえたもので、地形と風を形式化した屋根が作品の魅力となっている。

地形に沿ったアプローチ階段を下ると湖面レベルの景色が広がる。この時水面は、人の居場所となる。もうひとつは、地面に接した屋根へのアプローチであり、芝生の屋上で寝そべると目の前は湖に浮かぶ中島だ。

これらが、納谷さんの言う「自然と人の手が織りなす物語」なのであろう。お題の如く、夏に「あずましい」建築であり、冬の静寂も想像できる。爽やかな建築であり、優れた作品である。

設計競技審査委員会委員 佐藤 孝



優秀賞

# 「稲穂の生育を楽しむ住まい」

大瀬戸 杏

学校法人美専学園 北海道芸術デザイン専門学校2年

北海道の雄大な田園風景に浮かぶ平坦な大屋根と、ガラス張りの透明な空間。季節や日々の時間の流れに委ねられ、絶えず変化し続ける自然と水田の風景と人の営み。そのような環境を、五感で感じながら日々暮らしてみたいという、作者のストレートな想いが美しいパネルに表現されている。

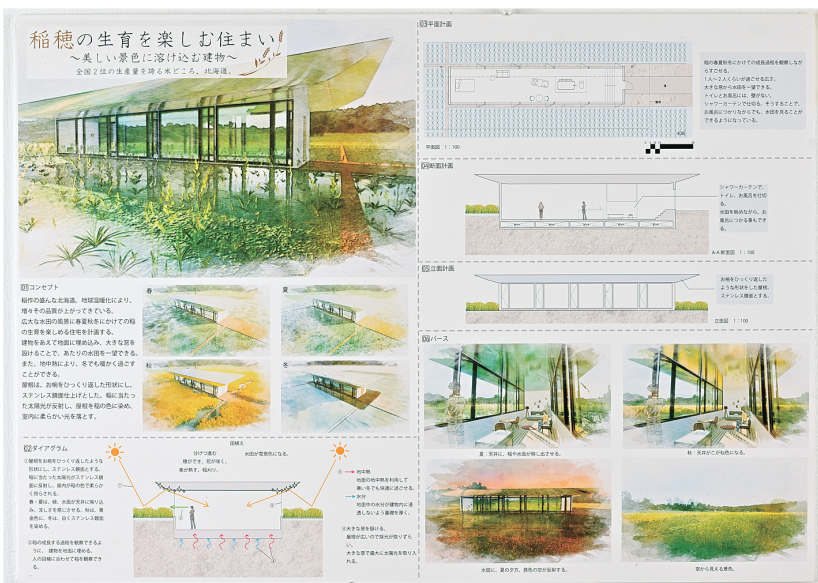
軒がせりあがるように湾曲したステンレス製の大天井が、春は田植えを終えた水面に映りこむ青空を、夏は風に揺らぐ鮮やかな緑の稲を、秋には黄金色に輝く稲穂を、冬は広大な白い雪原の景色を映す。床を掘り込むことによって、水田の中に身を沈めるような感覚の中、低い視線で、四季折々の風景と稲穂の成長を楽しむことができる。

夕暮れ時、水田越しにすまいのあかりを目指しながらの帰宅など、さまざまな生活のシーンを想像することが楽しい。

ステンレス天井の形態や角度、様々な北の生活シーンに対応させた床レベルの取り方や家具の使われ方などには、さらなる建築的な工夫の余地もあろう。この住まいのあり方は、近代建築のガラスボックスの文脈上とも、開拓された広大で平坦な農地の中に、農家がポツンと佇む北海道の原風景の文脈上にあるとも受け取れる。

設計者には、今後さらに踏み込んだ新しい北のすまいのあり方を模索してほしいと願う。

設計競技審査委員会委員 小澤 丈夫



奨励賞

# 「移り変わる色と心」

杉下 英 宇

北海道科学大学 4 年



今回のテーマは、従来の北海道の住宅のアンチテーゼを求めているのかもしれませんが、この作品は、四季の移ろいや自然の営みを住まいの中に、できるだけ取り入れたいとの作者の意図を良くあらわした提案となっています。

四季の移ろいや色の変化は人の心に大きな影響を及ぼすものでありながら、今の（北海道の）住宅は、これから全く切り離された廃墟になっているとの作者の問いかけです。

この住宅は農業を営む多世代が同居する住まいです。段差のある棚田の農地にその段差を強調した床面を作り、各所に諸室や作業場を分散配置したつくりで、瓦葺きの庇の深い大屋根をかけ渡しています。

四季の変化に応じて大屋根の軒裏越しに棚田の風景を眺める場面を大事にし、これを古代の和歌に託して表現しています。この住まいからは四季の色彩の変化は勿論、生き物の発する音が聞こえ、農地を渡ってくる風を感じる事ができて、自然と共鳴する住まいになっています。

本州の民家にみられる深い庇を持つ屋根と1階の開放的な間取りは、それだけで暑さ対策になっており、日陰と心地良い通風があれば暑熱を避けられるという先人の知恵の産物となっています。北海道の住まいは、これとは対極的なつくりとなっており、昨今の温暖化により、酷暑期には冷房設備を設けるしか対策がありません。この提案では、おそらく冷房なしでもほぼ快適に過ごせるのではないのでしょうか？

多雪地での瓦葺きが可能かという技術的な問題点や、冬の生活像がやや見えにくいという欠点もあります。しかしながら、北海道の住まいは、自然と切り離されているという問題提起であり、この住宅では充分に自然と交流できる場面を作り出しており、北海道人のあこがれを良く表現していますし、今後の住まいづくりのボキャブラリーのひとつになりそうです。作者の和歌に託した空間表現や、自然の移ろいを現した文学的感性に敬意を表します。

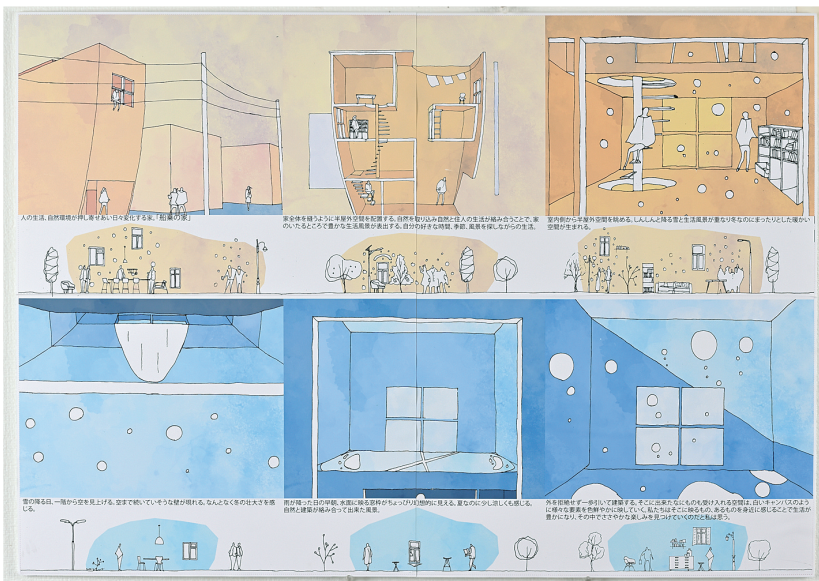
設計競技審査委員会委員 松田 真人

奨励賞

# 「船乗の家」

田中 篤 史

北海学園大学 2 年



美しいイラストと短い文章だけで空間の魅力が伝わってくる秀作。船底を想わせる特徴的な断面は多くの審査員の心を捉えた。

住宅地に置かれたマッシュな殻の中に、住まいと半屋外空間が立体的な絡まりを持って存在する構成にはリアリティがあり、積雪寒冷地の北海道であるからこそ四季の変化を存分に楽しめる装置として機能するだろう。

「外を拒絶せず一歩引いて建築する」という作者の姿勢も、これからの『北の住まい』のあり方を示唆する切れ味良いフレーズだ。

『夏も楽しむ』というコンペ課題への応答を考えると、夏の魅力を連想させる仕掛けや説明が、もう少し明快にプレゼンテーションされていれば、より上位の賞を射止めていたであろう。

周辺環境とのバランス感などを含め、建築的なセンスの良さを強く感じさせる作品である。

設計競技審査委員会委員 赤坂真一郎

奨励賞

## 「都市の縁側へ」

納谷 龍輝

北海道建築設計監理 株式会社



敷地は札幌市中央区大通西1丁目。隣を創成川が流れる縁側地域。ここに緑に包まれた森をつくり、柱とワイヤーを構造体として、地盤から浮いた「住まい」等を設ける提案である。

緑・樹木と「住まい」の組合せが斬新で目にとまる案である。

ここに「住まい」かと思わせるが、何故か心地よい空間が出来ている。

開放感と軽快な構造が緑の中で踊っているようで楽しい。構造ユニットが単純で明快だが、断面を見ると高さが同じである。多少高さの違いがあっても良いのではないだろうか。

しかし、一層目から四層目までの共有空間と私的空間のあいだに快い距離感を保ち、緑で見え隠れする集合する住まいは、訪れる人の目を楽しませる。

雪の積もる札幌でも、1年を通して十分に豊かな場になると思われる。さらに空中で大通公園まで繋がってほしい気持ちがわいてくる作品である。ただここで動いてみたいと思うが、住んでみたいと思えるかは？である。

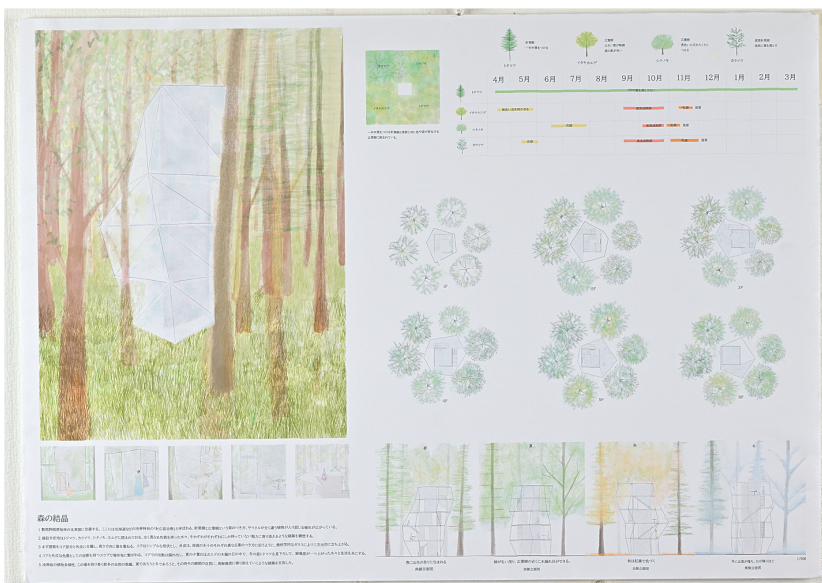
設計競技審査委員会委員 澤田 貞和

奨励賞

## 「森の結晶」

小西 神太郎 (北海道科学大学大学院 1年)  
 田村 さやか (北海道科学大学 4年)

(共同作品)



野幌原始林の森の中に挿入された住居は、この場所に植生する針葉樹と広葉樹の枝張り間を縫うように、ガラス張りの5層の空間が上昇する。

夏は広葉樹の木葉が生い茂り、冬は針葉樹だけが青々として季節をふんだんに楽しむことができる。ガラスの壁は樹葉の季節の変化を受け生活を楽しむことができる。実質的な壁はガラス面ではあるが、視覚的な壁は樹木となるであろう。

森の中で自然現象の変化とともに暮らす家は四季折々に空間となりお気に入りの場所を選べる楽しさが想像できるのである。

提出されたプレゼン図面は前述した空間の表現が乏しくあくまでも私的な想像により評価したものであり、表現がよければ上位賞も望め残念であるが、奨励賞には値する。

設計競技審査委員会委員 小西 彦仁

# 入選作品

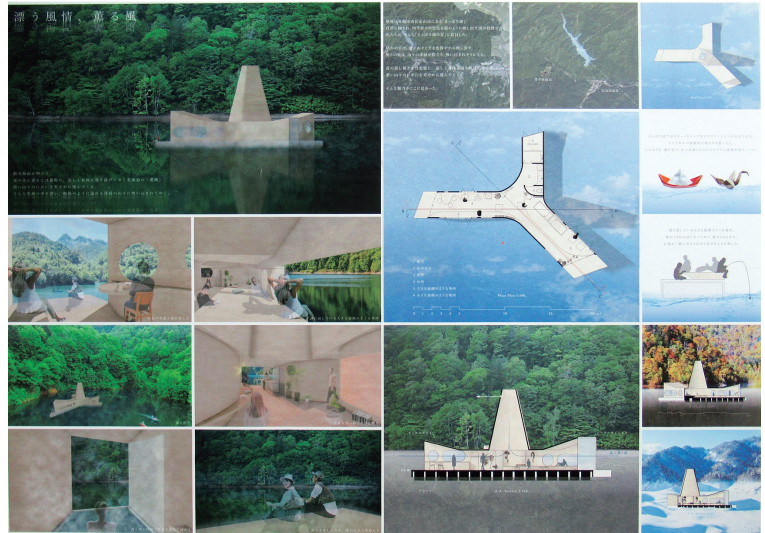
渡 邊 天 翔

北海道大学大学院 1年



有 村 萌 花 (北海学園大学 4年)  
牧 野 茜 (北海学園大学 2年)

(共同作品)



菅 原 忠 壺

室蘭工業大学大学院 1年



# 1次審査通過作品

奥山 颯斗

北海道科学大学 4年



宮本 朋治

学校法人美専学園 北海道芸術デザイン専門学校 2年



阿部 真依 (北海道科学大学 4年)  
中西 紗雪 (北海道科学大学 4年)

(共同作品)



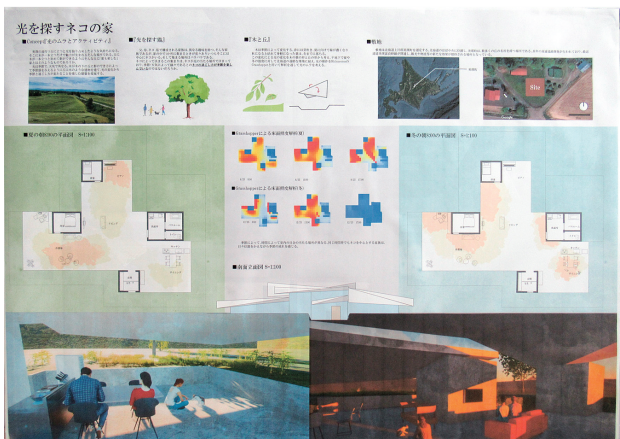
鈴木 大喜

北海道科学大学 4年



吉宮 綾花

室蘭工業大学大学院 1年



谷 敷 広太

室蘭工業大学大学院 2年





# 1次審査通過作品

松下 鯉太郎

北海道大学大学院 1年



真鍋 孝輔

北海学園大学 4年



最終審査（公開審査）



入賞者・審査委員との座談会



表彰式

## 第49回 「北の住まい」住宅設計コンペ 総 評

北海道の夏は地球温暖化の影響もあり、ここ数年気温が高い傾向にある。夏は、今までも爽やかな季節として特に道民はレジャー、アウトドアライフ、旅行等で有効に過ごしてきた季節である。しかしながら積雪寒冷地として位置付けられる北海道の家は、やはり冬の生活を重要視せざるを得なかった。このような気候条件がありながらも、今までとは異なる夏の暑さを無視はできない状況になってきた。したがって、北海道も近年の気候変動に対応する住空間のあり方も重要なテーマになってきている。

今年49回目を迎える「北の住まい」住宅設計コンペにおいては、上記のような北海道の気候変動の影響やインバウンドの増加を踏まえながら、課題タイトルを「夏も楽しむ」とした。北海道における、冬の生活と夏の生活の建築形式が改めて問われる課題でもあった。

今年9月20日の締切日まで応募してきた総数は45作品であった。昨年よりも増加したものの、ここ数年においては平均的な応募数といえる。その後、第一次審査が9月30日から10月2日に行われた。7名の各審査委員が7票の持ち票を各作品に投票し、1票でも入った作品を第一次審査通過作品とした。今回は18作品が選出された。その後、第二次審査は、11月1日の午前中に開催された。改めて18作品に対する審査を行い審査委員間において評価の視点を共有しながら、投票によってベスト10作品を選出した。そして、同日の午後に第三次審査が公開で行われた。各審査委員からの評価の視点を提示しながら議論を重ね、最終的に最優秀賞作品1点と優秀賞作品2点、そして奨励賞作品4点を決定した。

最優秀賞作品（木下、貝出、共同案）は、極めて建築的な完成度が高い作品であった。建築設計に携わる審査委員に空間の臨場感を与えるほどのリアルさを印象付けた。夏と冬のアクティビティを機能させるための空間提案は秀逸であった。

優秀賞作品（納谷案）は、北海道らしい夏の湖畔風景に融合する建築形式であった。取り巻く自然の風景と共に、建築そのものが美しい。願わくはこの建築の冬の風景も見てみたかった。

もう一つの優秀賞作品（大瀬戸案）も、北海道らしい農村風景に溶け込むような提案であった。半地下を加えてアイレベルを下げることによって、新たな稲穂の風景を見渡せる開口操作が巧みであった。

そして、奨励賞作品4点もそれぞれに特徴があり魅力的であった。さらなる説得力が加わると上位入賞も十分にあり得る作品であった。

北海道の自然は、美しく、そして多様であり、それぞれの季節にも魅力がある。もし四季折々に適応する住宅があったなら、もっと生活が豊かになるに違いない。冬の生活を重視しながらも夏の生活、あるいは春や秋の生活と共にある住宅のあり方を想像させられる機会でもあった。北の住まいは、やはり自然との関係性が不可避である。

応募者のみなさんが、今後も北海道住宅のあり方を追求し、将来、ぜひ実現されることを期待したい。

設計競技審査委員長 米田 浩志

## 「積み家」

第49回北の住まい住宅設計コンペ最優秀賞受賞者

木下 はるひ (室蘭工業大学大学院2年)

貝出 萌華 (室蘭工業大学大学院1年)

(共同作品)

この度は第49回北の住まい住宅設計コンペにおいて最優秀賞をいただき、ありがとうございます。今回この受賞に際して、この誌面に寄稿文を書く機会をいただいたので、設計の過程と作品について書かせていただきたいと思えます。

今回のコンペの課題タイトル『夏も楽しむ』は、一見するといたって普遍的な課題です。だからこそ“北海道に建つ”ことを素直に考えることが重要だと私たちは思いました。そこで今までの北海道住宅を尊重するような建築を目指し、スタディを始めました。

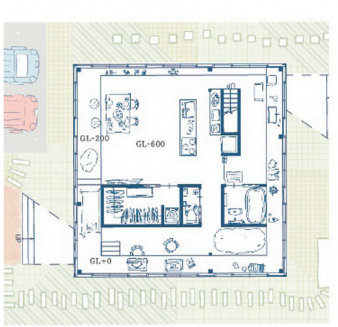
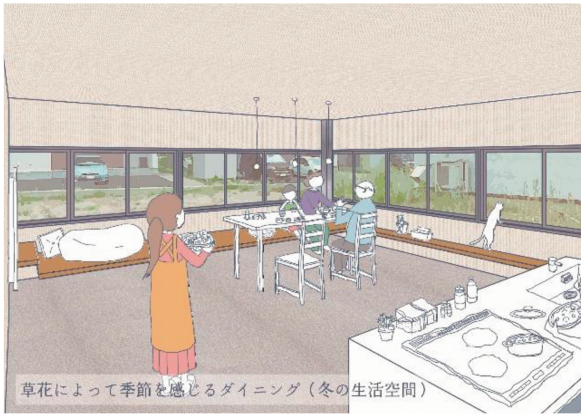
まず、敷地は室蘭市の新興住宅地としました。私たちはこのような自由に敷地を設定できるコンペにおいて、あえてありふれた住宅街を選定し、建築の構成で勝負したいと思いました。この場所は一般的な新興住宅街で、画一区画に相互の関係性を欠いた住宅が並ぶ姿がみられます。

私たちは最初に北海道住宅の特徴を整理していきました。豊かな内部空間と質素な外部空間の構成、小さな開口や風除室、閉塞的なファサードなどがあげられ、これらは冬を旨とすることからつくられた特徴です。これらの北海道住宅の特徴を夏も楽しむ空間をつくる手掛かりにできないか考えていきました。そこから夏を旨とした際には、外部空間の設えや内外の境界をあいまいにするような中間領域が適切ではないかとスタディを重ねていきました。夏の暑い日には直射日光を遮り、涼しい日には心地よい風が抜ける空間を想像し、庭空間をひとつの部屋のように一層分内部空間の間に積む形式としました。また周囲の住宅との高さ関係から一階を凍結深度まで掘り下げ、適切な高さ関係と隣家との距離感をつくりました。

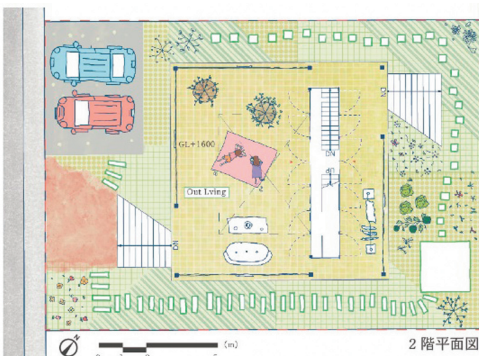
次にこの外部空間の使い方について説明していきます。ここはワンルールの庭空間であり、断熱ラインの外側で様々なアクティビティが生まれることを考えました。夏や中間期は住居のリビングスペースとして家族団らんの時を過ごしたり、ご近所さんにご飯を食べたり、様々なアクティビティを許容する空間となります。一方冬には、雪の積もらない外部空間として、スキーのメンテナンスをしたり、寒い中で鍋を囲ったり、夏とはまた違う暮らしができる空間となります。この空間によって一年を通して北海道の暮らしをより豊かにできると期待し、“Out Living”と名付けました。

ここで暮らす住民は、今までの北海道の豊かな内部空間を持ちながら、新たな外部空間を持ち、外部環境の豊かさをも享受することができます。半地下の1階と3階は、回遊性を持った仕切りのないワンルールの内部空間とし、それらを風除室のような階段室でつないでいきます。1階は“Out Living”の基礎となっており、3階に大きな吹抜けを設けることで、“Out Living”の生活が全体へとつながっていきます。ヴォリュームも現在の陸屋根住宅から大きく逸脱していない形としています。この住宅が建つことによって閉鎖的な街並みに風や光を取り込み新しいリズムを加えます。Out Livingによって隣の住宅にも外部環境の豊かさをおすそわけできる魅力の詰まった建築になりました。

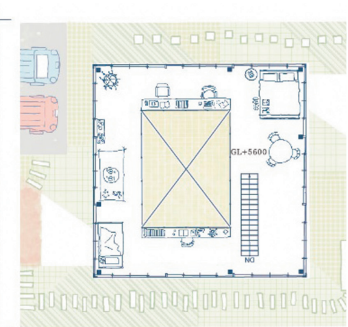
今回の受賞に関しては、修士2年最後のコンペとして応募し、最優秀賞という栄誉ある賞をいただけたこと大変うれしく思います。この賞を受賞し、学生生活で培った建築の学びの集大成として自信になりました。日ごろご指導いただいている山田先生、議論を共にする研究室の同期や後輩、また先輩方のおかげだと思います。この場をお借りして感謝申し上げます。この作品がいつか実現できるように今後も精進していきたく思います。



1階平面図



2階平面図



3階平面図